

『逆修説法』に説かれる「孝養父母」について

吉原寛樹

〔抄録〕

本稿で取り上げる『逆修説法』は法然が逆修法会において行った講説の聞書である。そこで説かれる「孝養父母」の講説は『観経釈』や『選択集』より詳しくなっている。この事について、中原親子の関係を踏まえる法然の配慮、また『逆修説法』以前に修された尙然の逆修法会における願文「尙然上人入唐時爲母修善願

文」を通して考察した。その結果、法然は『逆修説法』における「孝養父母」の講説において父母健在のうちに「孝」を修する事を詳説していることを指摘した。

キーワード 法然、『逆修説法』、中原師秀、尙然、孝養父母

はじめに

『逆修説法』は、建久五年（一一九四）^① 中原師秀（生没年不詳）^② が阿弥陀仏来迎引接像を刻み、その開眼供養にあわせて行なった逆修法会に法然上人（一一三三～一二二二、以下全ての尊称を略す）^③ が導師として招かれた時の聞書である。『逆修説法』の諸本は、漢語系三本（安土浄厳院本『漢語燈録』所収『逆修説法』、恵空本『漢語燈録』所収『逆修説法』、義山本『漢語燈録』所収『逆修説法』）と和語系三本（『西方指南抄』所収『法然聖人御説法事』、『師秀説草』、『無縁

集』）に分けられる。この中では、恵空本『漢語燈録』所収の『逆修説法』が最も原型に近いとされるので、ここでは恵空本所収のものに依る事とする。

問題提示

「孝養父母」は、『観無量寿経』の散善縁に、
欲_レ生_ニ彼国_ニ者當_レ修_ス三福_ヲ一者孝_ニ養父母_ニ奉_ニ事師長_ニ慈心_ニ不_レ殺_ヲ
修_ス十善業_ヲ二者受_ニ持三歸_ヲ具_ニ足衆戒_ヲ不_レ犯威儀_ニ三者發_ニ菩提心_ヲ
深信_ニ因果_ヲ讀_ニ誦大乘_ヲ勸_ニ進行者_ヲ如此三事名爲_ニ淨業_ト（^④）
深信_ニ因果_ヲ讀_ニ誦大乘_ヲ勸_ニ進行者_ヲ如此三事名爲_ニ淨業_ト（^⑤）

と説かれている三福の中の一つである。つまり、

○世福 (世間的道德)

○戒福 (仏の定められた戒律を守る)

○行福 (自ら正法を修行し、その法で他人を教化する善根)

の世福 (世間的道德) にあたる箇所である。

浄土三部経を善導の説に依って東大寺において講説したのが法然の『三部経釈』である。『逆修説法』では『無量寿経』・『阿弥陀経』を初七日・三七日・五七日で、『観無量寿経』は二七日・四七日・六七日という具合に、交互にそれぞれの経を用いて講説している。法然はこの『三部経釈』(特に『観無量寿経釈』)と『逆修説法』、また『選択集』において「孝養父母」を講説している。

そのうち、『逆修説法』においては、二七日と四七日で「孝養父母」を説いている。そこで、まず二七日で説かれる「孝養父母」を見てみると、

先三福者一孝養父母者有世間孝養有出世孝養世間孝養者俗書云立身行道揚名後世以顯父母孝終也申於世有名譽而以下好者哉是某子被云為孝養極也^⑤

と述べるのみである。しかし、四七日の「孝養父母」の方がより詳しく説かれている。そこで、本稿では「孝養父母」について四七日の所説を中心として考察していきたい。

ここで『観無量寿経釈』(以下『観経釈』)と『選択集』に説かれる「孝養父母」の箇所を『逆修説法』と比べてみると表1(本稿の最後に掲載)のようになり、明らかに『逆修説法』が他の二本より詳しく

説かれていることが分かる。そこで、なぜ法然は『逆修説法』で「孝養父母」を他の二本より詳しく説かれたかについて考えてみたい。

『逆修説法』四七日に説かれる「孝養父母」について

ここで提起した事を考察していくにあたり、取り上げておきたいのが、

而大法主禪門偏為一人孝子大徳被勸深入往生浄土門事^⑥
哀被思合候也^⑦

の文である。この文は四七日で説かれている「孝養父母」の箇所の最後に出てくるものである。この文は逆修法会の主宰者である大法主禪門(中原師秀)が、息子である安樂房遵西(俗名中原師広、?〜一二〇七)に勧められて、浄土門に入った事を述べている。この文により、四七日に説く「孝養父母」の講説において、法然が中原親子の關係を意識していたのは当然のことかと思われる。文中に出てくる「孝子」という語句は、「よく父母に仕える子・親に孝行な子」という意味であるから、この文脈においては重要な語句である。この「孝子」と関連する「孝養」という語句が、四七日の「孝養父母」の箇所に出てくる。まず、四七日の講説に見られる「孝養始」・「孝養終」と「真実孝養」の三つの語句を見ていく事にする。

法然は『観経釈』では、

在家孝養父母之旨廣如説論語孝經^⑧

とし、また『選択集』第十二章では、

世間孝養者如孝經等説^⑨

として、「孝養父母」を説く時、必ず『孝経』を挙げている。

さらに『逆修説法』でも「世間孝養」を講説する冒頭に、

世間孝養者俗家所_レ言孝経等説是也⁽¹⁾

として、『孝経』の冒頭第一章の「開宗明言宣章第一」（『孝経』の宗旨を顯わして孝道の大義を明かす章）の一節を引用しながら次のように述べている。

世間孝養者俗家所_レ言孝経等説是也⁽²⁾身体髮膚受_ニ于父母⁽³⁾不_レ敢毀傷⁽⁴⁾孝始也身体髮膚受_ニ父母⁽⁵⁾者今以_レ之⁽⁶⁾意⁽⁷⁾有_ニ二義⁽⁸⁾一人懷妊後我妊_ニ何物⁽⁹⁾覽有_ニ不_レ人物⁽¹⁰⁾樣樣不_レ審可_レ覺事⁽¹¹⁾候初見生⁽¹²⁾者身体髮膚無_レ違_ニ父母⁽¹³⁾無_レ毀傷事⁽¹⁴⁾有_ニ正⁽¹⁵⁾子_ニ之時⁽¹⁶⁾令_レ悦_ニ父母⁽¹⁷⁾心⁽¹⁸⁾故以_レ之⁽¹⁹⁾申_ニ孝養始⁽²⁰⁾覺候⁽²¹⁾一人身併父母之身体也然此身西_ニ而打損⁽²²⁾或_レ與人_ニ為_ニ口論⁽²³⁾被_ニ切突⁽²⁴⁾或不_レ治振舞付⁽²⁵⁾病如_レ此者專傷_ニ父母⁽²⁶⁾也然者全_ニ此身⁽²⁷⁾我身父母身分⁽²⁸⁾者思_ニ構⁽²⁹⁾不_レ毀傷⁽³⁰⁾申_ニ孝養始⁽³¹⁾歟⁽³²⁾覺候

つまり『孝経』の「孝養始」の文を法然は次の二義を以て解釈している。

①親から生まれた子が父母と異なる事なく無事に生まれてくること
が孝養の始まりである。

②そうした親から受けた身体を人との争いで傷ついたり、不摂生をして病もちになったりする事が無いのも孝養の始まりである。

さらに、「孝養終」については、

立_ニ身行⁽³³⁾道者随_ニ己家⁽³⁴⁾各学⁽³⁵⁾行⁽³⁶⁾可_ニ学⁽³⁷⁾習⁽³⁸⁾之道⁽³⁹⁾揚_ニ名⁽⁴⁰⁾開_ニ徳⁽⁴¹⁾仕_ニ身朝⁽⁴²⁾廷⁽⁴³⁾施_ニ普四海⁽⁴⁴⁾被_ニ云⁽⁴⁵⁾是其人⁽⁴⁶⁾之子⁽⁴⁷⁾顯_ニ父母名⁽⁴⁸⁾申_ニ孝養終⁽⁴⁹⁾⁽⁵⁰⁾

と述べている。対応する『孝経』の本文では、「立身行道揚名於後世」

以顯父母孝之終也。」となっている。これを踏まえて法然も、学問に志して宮仕えをする身となって、「名と徳をあげて、自分の両親の名をも有名にする事」が「孝養終」であるとしているのである。

次に「真実孝養」については、所謂「報恩偈」（『法苑珠林』第二十巻入道篇にも引用あり）を引用して次のように述べている。

次_ニ出世⁽⁵¹⁾孝養者流転三界中恩愛不能断棄恩入_ニ無為⁽⁵²⁾真実報恩者申_レ不_レ繼_ニ父道⁽⁵³⁾不_レ随_ニ母心⁽⁵⁴⁾不_レ運_ニ水之志⁽⁵⁵⁾不_レ守_ニ顔色之趣⁽⁵⁶⁾而或交_ニ山林⁽⁵⁷⁾或住_ニ蘭若⁽⁵⁸⁾修_ニ行⁽⁵⁹⁾佛道⁽⁶⁰⁾者當時思者似_ニ不_レ知_ニ恩忘⁽⁶¹⁾徳暫棄_ニ有漏⁽⁶²⁾恩徳⁽⁶³⁾終求_ニ無為⁽⁶⁴⁾報謝⁽⁶⁵⁾也是申_ニ真実孝養⁽⁶⁶⁾也⁽⁶⁷⁾

つまり、父の家業も継がず、母の心にも随わず出家をすることは、その当初の姿からすれば恩を知らず、徳を忘れたようではあるけれども、仏道の立場からいえば、有漏の恩愛を越えた、煩惱に左右される事のない平安な境地を求めることこそが、真実の報恩の姿であるというのである。

今挙げた「孝養始」「孝養終」「真実孝養」の部分は『観経釈』や『選択集』には見られず、『逆修説法』独自の講説である。では、なぜ法然は『逆修説法』でこのように「孝養父母」を詳説したのであろうか。まずここでは中国浄土教祖師の「孝」への言及を取り上げてみたい。次に見るように曇鸞（四七六～五四二）・道綽（五六二～六四五）・善導（六一三～六八一）も中国の伝統的な孝思想の影響下にあり、法然自身の出家学道に即してみても、法然の心層下には「孝養父母」の問題はあったであろうと推測されるからである。

そこで「孝養父母」に関して、法然も承知していたに違いない所を

中国浄土教典籍の中なから取り出してみたい。

まず「孝子大徳」の「孝子」について、曇鸞の『往生論註』巻上には『往生論』の第一句目の文にある「世尊」を注釈した次のような箇所を見ることができる。

夫菩薩^レ歸^レ佛^ハ如^下孝子^ノ之^ニ歸^ニ父母^ニ忠臣^ノ之^ニ歸^ニ君^ノ后^ニ動靜非^レ己^ニ出沒必由^上知^レ恩^ヲ報^ヲ徳^ヲ理^ヲ宜^ク先啓^ニ又所願不^レ輕^{カラ}若如来不^レ加^ニ威神^ヲ將何以達^カ乞^{セン}加^ニ神力^ヲ所以仰告^ニ

つまり、およそ仏に帰依することは、あたかも孝子が父母に随い、忠臣が主君に仕える場合、動静を自分勝手にせず、出所進退がすべて知恩・報恩の心に基づいているようなものだとして述べている。このように、曇鸞は仏に帰依し仕える菩薩を「孝子」という中国的な用語を以て説明しているのである。なお、『孝子経』⁽¹⁸⁾という名の經典もある。内容は、出家者が父母に乳哺の恩を報ずるのは、父母をして悪を去らしめ善を勧め、五戒を持ち、三宝に帰せしめることにある、というものである。次に道綽の『安樂集』第十二大門では、『十往生阿弥陀仏国経』に説かれる十往生法の一節が引用されているが、その第五は次のようになっている。

五者正念^ニ孝^ニ順^シ於^ニ父母^ニ敬^ニ奉^シ於^ニ師長^ニ不^レ起^サ憍慢^ノ心^ヲ往^ス生^ニ阿弥陀佛^ニ

ここでは「孝順父母」が、奉事師長・不起憍慢と共に往生法の一つとしてあげられている。

次に善導の『観経疏』序分義では、

一言^ニ孝養父母^ト者此明^ニ一切凡夫皆藉^テ縁^ニ而生^{スル}一^ニ (中略)

不^レ行^ハ恩^ヲ孝^ヲ者即與^ニ畜生^ニ無^シ異^{ナル}也又父母^ハ者世間福田^ノ之^ニ極^{ナリ}也佛者即出世福田^ノ之^ニ極^{ナリ}也⁽²⁰⁾

とし、「孝養父母」を福田思想と関連づけて述べている。これらはいずれも法然が承知していた孝の思想である。

法然の逆修について

ここまでは法然の『逆修説法』における「孝養父母」について論じてきた。当時の逆修観から見れば、『孝子伝』⁽²¹⁾などを唱導における一資料として扱っていても、「父母健在のうちに孝を修する」という事を逆修法会の目的の一つと考えるのはかなり特異な事であろう。しかし、『大日本史料』を調べてみると、僅かに父母の恩を目的としている逆修法会があった事が伺えるのである。それは『本朝文粹』⁽²²⁾に載っている裔然(九三八―一〇一六)の逆修法会における願文である。ここではそれを取り上げる事とする。

法然と裔然との因縁

裔然の逆修法会における願文とは、平安時代に成立した藤原明衡編になる漢詩文集『本朝文粹』第十三巻にある「裔然上人入唐時爲母修善願文」である。この箇所の編者は『日本往生極樂記』(慶氏日本往生記)・『日本往生記』・『往生極樂記』とも称す)の著者、慶滋保胤(九三二?―一〇〇二)である。この書に関して『逆修説法』初七日では阿弥陀仏の化身の功德を述べる箇所に、

又智光曼陀羅^ヲ有^リ世間^ニ流布^ニ之本尊^ニ其因縁^ハ人常知^レ之^ヲ不^レ可^ニ具申^ス

可^レ見^ニ日本往生伝^一 ⁽²³⁾

とあるが、ここに言う「日本往生伝」は『日本往生極楽記』を指している。この事からも当然、法然是慶滋保胤の事は知っており、源信と同行の慶滋保胤の著書も読んでいたであろう。

この裔然是平安時代中期の三論宗の学僧として知られているが、九八三年に宋に渡り、五台山などを巡礼したのである。この事は、『扶桑略記』第二十七(圓融 天元三年七月〜五年正月)の八月十六日の箇所にも、次のように記されている。

有^レ心^ニ渡海^一蓋歴^ニ觀名山^一巡^ニ礼聖跡^一也適遇^ニ商客^一將^レ付^ニ歸齋^一裔然郷土非^レ不^レ懷尚奇^ニ心於台嶺之月波浪非^レ不^レ畏偏任^ニ身於清涼之雲^一往者如出^ニ矛蟬^一而趣^ニ中天竺^一靈仙^ニ掬^ニ家國^一而住^ニ五臺山^一縦雖^ニ庸才^一欲^ニ追^ニ古跡^一伏望垂^ニ允容^一給^ニ小契^一以為^ニ行路之遠信^一者夫以^ニ二方異^一域雲水雖^レ迥一味同法師資是親件裔然学伝^ニ三論^一志在^ニ斗數^一願令^ニ万里之飛蓬^一付^ニ一箇之行李^一以^レ牒⁽²⁴⁾

裔然是帰国後、持ち帰った釈迦如来像を安置するための伽藍(清涼寺)を建立することを奏請したとされている。この釈迦如来像について塚本善隆氏は、

釋迦佛瑞像は諸宗の傳道者求法者の本尊となつて全國的にその模像を流布せしめたとし、釋迦堂を中心とした寺域は、各宗の「ひじり」達の、殊に鎌倉期には新興念佛宗諸宗の大衆への宣教の場となつたし、念佛宗興隆に刺戟せられて南都佛教徒の復興運動も釋迦佛瑞像を中心にしてしばしば展開せられた。⁽²⁵⁾

と述べている。さらに『法然上人行狀絵図』第四巻によると、

保元々年上人二十四のとし、叡空上人にいとまをこひて嵯峨の清涼寺に七日参籠のことありき。求法の一事を祈請のためなりけり。この寺の本尊釈迦善逝は、西天の雲をいで、東夏の霞をわけて三國につたはりたまへる靈像なれば、とりわき懇志をはこびたまひけるも、ことはりにぞおぼえ侍る⁽²⁶⁾

とあり、法然も一向専念義の教えを立てる以前、二十四歳の時に清涼寺を訪れている。その目的はひたすら生死を離れる事のできる教えを見出さんと清涼寺の釈迦如来像に祈るためであつたとある。この釈迦如来像は印度・中国・日本の仏教國に伝わつたものであるから、法然も真心から願ひ祈られたのではないかと述べている。

「裔然上人入唐時爲母修善願文」について

裔然是入宋するにあたり、その前年の九八二年、四十四歳頃に母のため逆修法会を営んでいる。『本朝文粹』第十三巻に載っているのはその時の願文である。それによれば、まず、

裔然有^ニ心願^一如来可^シ證明^一裔然天祿^ニ以降有^レ心^ニ渡海^一本朝久停^ニ乃貢之使^一而不^レ遣^ニ入唐間待^ニ商賈之客^一而得^レ渡^ニ今遇^ニ其便^一欲^ニ遂^ニ此志^一裔然願^ニ先參^ニ五臺山^一欲^ニ逢^ニ文殊之即身^一願^ニ次詣^ニ中天竺^一欲^ニ禮^ニ釈迦之遺跡^一 ⁽²⁷⁾

とし、入宋への思いを持ち始めたのは天祿(九四七〜九五一)のころであり、入宋の際には五台山を巡礼し、さらにインドに渡り釈迦の靈跡を巡礼しようとする願ひがあつた事が述べられている。さらに、裔然去^ニ難^一去^ニ之家郷^一棄^ニ難^一棄^ニ之恩愛^一寄^ニ心於無知之域^一委^ニ身於

異類之人^ニ豈不^レ哀^{シカラ}哉^レ豈不^レ痛^{マシカラ}哉^レ然^{レドモ}猶^レ不^レ顧^ミ軀^ヲ命^ヲ不^レ著^セ名利^ニ渡^リ海^ヲ登^リ山^ニ由^ニ忍^ビ寒^ヲ忘^レ苦^ヲ修行^ニ是^レ勤^{メバ}罪^ヲ根^ヲ漸^ク滅^ス大慈^ニ大悲^ニ釈迦^ニ文殊^ニ可^ク以^テ憐^ス愍^ス可^シ以^テ相^ニ迎^{ヘタマフ}佛^子自^ラ發^シ此^ヲ願^ヲ獨^ニ怪^{シム}此^ノ心^ヲ

とあり、故郷を去り恩愛を棄て、名譽や利益を求めず、ひたすらに修行する事によって罪根を消滅し、臨終の時には釈迦・文殊菩薩の来迎を期したいという願志を表している。これについては次のような自問自答がなされている。

其謗^ル者^ク云^フ凡^ソ入^リ唐^ニ求^フ法^ヲ之^ノ人^ハ自^ラ宗^ニ者^ハ弘^ク法^ヲ大^ニ師^ニ天^ニ台^ニ者^ハ傳^ヘ教^ヲ大^ニ師^ニ皆^ニ是^レ權^ニ化^ニ之^ノ人^ハ希^ニ代^ニ之^ノ器^也也^ニ此^ノ外^ニ之^ノ倫^ヲ才^ヲ名^ヲ超^エ衆^ニ修^ニ學^ニ命^ヲ世^ニ如^キ佛^子者^ハ不^レ及^ニ古^ノ人^ニ之^ノ喻^猶猶^レ不^レ可^ク三^ニ天^ニ之^ノ階^ヲ矣^ニ定^メ知^ル表^ス我^ノ朝^ニ無^レ佛^子人^也竊^ニ以^テ不^レ得^ル意^ヲ人^所陳^ル宜^シ然^ル夫^ノ非^ニ魚^者者^ハ不^レ可^ク以^テ知^ル魚^ノ樂^ヲ非^ニ我^者者^ハ不^レ可^ク以^テ覺^ル我^ノ心^ヲ

つまり、弘法大師や伝教大師が唐に行き法を求めたのは、仏・菩薩の化身であるからであり、それ以外の者が法を求めても無駄であると非難されたとしても、その目的は、

為^ニ是^ノ斗^ノ數^ヲ為^ニ是^ノ菩^ノ提^ヲ也^ニ (中略) 曰^{ハバ}汝^レ何^ノ人^ヲ捨^{テテ}本^ニ土^ヲ朝^{スル}巨^ニ唐^ニ有^ニ何^ノ心^ヲ有^ニ何^ノ願^ヲ乎^ト

つまり、宋に行くのは自身の得脱のためであるとしている。さらに、故郷を捨てて唐に向かうのはどのような目的や願いがあるのかと問われても、

為^ニ求^フ法^ヲ不^レ來^ラ為^ニ修^フ行^ヲ即^ニ來^{ルト}也

と答え、宋に行くことはただひたすらに自分自身の罪障消滅の為の修行が目的であると述べている。このような自問自答から奮然の入宋に

対する並々ならぬ想いが感じとれるのである。そして、

佛^子心^ニ有^ニ難^キ忍^ビ之^ノ事^ニ如^キ來^ニ重^ニ照^ニ見^ニ之^ノ老^母在^リ堂^ニ行^ニ年^ニ六^ニ十^ニ其^ノ恩^ヲ是^レ深^ニ不^レ得^ル報^ヲ佛^子抛^テ母^ヲ欲^ス去^ル則^ニ可^シ失^フ孝^ノ行^ヲ携^{ヘテ}母^ヲ將^ニ留^{マフ}亦^ニ可^シ背^ク宿^ニ懷^ニ

と述べ、六十歳になる母に対する恩にはまだ報いておらず、その母を残して入宋すれば孝行の徳を失い、また母の傍に留まれば自身の悲願に背く事になるとしている。その心境を、

我^ガ母^ハ不^ニ是^レ人^ノ世^ノ之^ノ母^{ナラ}是^レ善^ニ縁^ノ之^ノ母^也若^シ萬^ノ人^ハ緩^ク類^ニ苦^ニ心^ニ而^ニ諫^ム之^ノ我^ハ未^ダ必^ズ從^フ若^シ一^ノ親^ノ形^ハ言^ニ變^ニ色^ヲ而^ニ留^{メバ}之^ノ我^ハ可^ク何^ノ逆^{ソフ}哉

と述べている。つまり周りの人々全てが入宋する事を反対しても従わないが、母が自分を引き止めようと顔色をかえて説得すれば、自分はその母の思いに背くことはできないと述べている。しかし、

誠^ニ勤^ニ我^ノ之^ノ佛^ヲ道^ヲ寧^{ズヤ}非^ニ我^ノ之^ノ慈^ニ堂^ニ乎

と述べ、仏道を求めるのは母ではなく自分自身であるとし、さらに続けて、

佛^子有^ニ男^ノ女^ノ兄^ノ弟^ノ二^ニ三^ニ人^ニ相^{シテ}議^ク曰^ク餘^ノ年^ノ之^ノ水^ヲ菽^ヲ者^ハ汝^ノ之^ノ所^ニ可^キ營^ム何^ヲ以^テ及^ニ飢^ニ寒^ニ後^ニ生^ニ之^ノ菩^ノ提^ヲ者^ハ我^ノ之^ノ所^ニ為^スレ^ハ先^ニ豈^ニ令^ニ隨^ニ惡^ニ趣^ニ乎^ト凡^ノ棄^ル恩^ヲ入^ニ無^ニ為^ニ真^ニ實^ニ之^ノ報^ヲ恩^ヲ

と述べている。つまり、兄弟達と相談した結果、「母の水菽は兄弟達に任し、母が亡くなつてからの菩提は奮然が行う事」となったのである。それは、「恩を棄て悟りの境地に入ることこそが真の意味で恩に報いる事である」として、母への孝の在り方を在家の兄弟達と出家の自分の場合とを峻別した上で、母のために逆修法会を営む事にしたの

である。

逆修法会の堂内の荘厳等については、

奉^レ圖^シ十齋佛菩薩及弥勒文殊梵天帝釈像一幀^ヲ奉^レ書^シ妙法蓮華經

仁王般若經各一部^ヲ便^チ於^ニ常住寺^ニ五日十講供養演説^ス

とあり、十齋仏・菩薩・弥勒菩薩・文殊菩薩・梵天・帝釈天の図像を

掛け軸にし、『妙法蓮華經』・『仁王般若經』を一部ずつ書写し、常住

寺で五日間、十講の供養演説をしたと述べている。さらに続けて、

是^レ即^チ爲^ニ慈母七七^ノ日^ヲ所^ニ逆修^{スル}也

として、この逆修法会は自身の母のためであるとしている。また、諸

菩薩の像を図絵した事や經を書写した目的については、

所^ニ以^テ圖^ニ繪^{スル}此佛像^ヲ者爲^ニ慈母^ニ一月十日精進歸依^一所^ニ以^テ講^ニ説^{スル}

此經典^ヲ者令^ニ慈母^ヲ現當植^レ因結^レ緣^也

として、仏像図絵は自身の母を仏教に帰依させるためであり、經典講

説は仏教に帰依し、結縁させるのが目的であるとしている。

ここまで、尙然の逆修法会の願文を見てきたのであるが、では法然

の『逆修説法』とはどのように対応するかは、次項の表を参照して頂

きたい。(なお、法然の『逆修説法』の箇所は傍訳『逆修説法』下巻

の『逆修説法』目次を参考とした。)

《法然と尙然の逆修法会における孝養に関する対照表》

	法然『逆修説法』	尙然の逆修法会願文
①	身体髮膚、父母に受けたり	対応箇所なし
②	身を立て道を行うゝ是れは其の人の子ぞ	対応箇所なし
③	五等の孝養	餘年の水菽はあなたの営む所である

④	顔色の孝養	一親が言葉に表し、色を変えて之を留めれば
⑤	流転三界中、恩愛不能断、棄恩入無為、真実報恩者	凡そ恩を棄てて無為に入るは真実の報恩なり
⑥	若し人、父母の恩を報ぜんと欲わば、父母に代わりて誓願を發して阿蘭若菩提場に入りて昼夜に常に妙道を修すべし	尙然の入宋の目的そのものと対応
⑦	出世にも身を立て道を行う方法あり。三藏法師・禪師・律師・羅什三藏・玄奘三藏・南岳大師・天台大師と云われる。	対応箇所なし
⑧	父の貧しからん者を寺内に置きこれを養い、母の貧しからん者を寺外に置きこれを養え	対応箇所なし
⑨	父母師僧に孝順するを戒と名づく	対応箇所なし

このように、両者には一部対応する箇所がある。この中でも③・⑤・⑥の箇所を見ていきたい。

まず③については、法然は「孝養終」についての説明で『孝經』より五等の孝養の中の一つである水菽の孝養を挙げている。これについて法然は、

是採^ハ薪^ヲ結^ヒ水^ヲ捻^ツ菜^ヲ拾^ヒ菓^ヲ朝暮養^ニ父母^ヲ孝養也^{②③}

とし、自分の両親を扶養する孝養であるとしている。また、尙然は日本に置いていく母の扶養を兄弟に託す時、「水菽」という言葉を用いている。「水菽」とは水を飲み、豆の粥をすすすること、粗食の事をいう。尙然の言う「水菽」とは法然の場合と同じく、『孝經』における「水菽の孝養」を指しているのである。

次に⑤については、法然は、父の家業も継がず、母の心にも随わず出家することは、その当初の姿をみれば恩を知らず、徳を忘れたよ

うではあるけれども、仏道の立場からいえば、有漏の恩愛を越えた、煩惱に左右される事のない平安な境地を求めることこそが、真実の報恩であると言っている。この箇所に対応する尙然の考えを見てみると、自身が仏道修行をする目的が母のためでなくてもよいのかという悩みに対し、恩愛を棄て悟りの境地に入る事が真の意味での恩に報いる事であると受け止めている。つまりこの箇所では、法然は講説、尙然は自問自答と各々状況は違うが、「恩愛を棄て悟りの境地に入ることが真実の孝養である」という同じ結論を出している。この事から法然と尙然の「真実の孝養」に対する考えの共通性が見られるのである。

また、⑥について見ると、法然は⑤にある「煩惱が不断のままで恩徳を捨てて、真実の報恩謝徳を求める事を真実の孝養」とする事の根拠として『大乘本生心地観経』巻第五の文を引用し、両親の恩に報いたいと願うなら、両親に代わり誓願をおこし、人里を離れた道場で修行し、昼夜常に悟りを求めよとしている。尙然の場合これに対応する考えは自分自身の罪障消滅の修行のために宋に渡るといふ求法の志であり、また入宋にあたり母に対する報恩のために逆修法会を営むという行動である。この考えが尙然にとっての「真実の孝養」なのである。

まとめ

本論では、『逆修説法』における「孝養父母」が『観経釈』・『選択集』より詳しく講説している所以を問題にしてきた。そこで、『観経釈』・『選択集』・『逆修説法』の「孝養父母」を詳しく対照してみると、『逆修説法』では他の二本には見られない「孝養始」「孝養終」「真実

孝養」の三つの語句を用いて「孝養父母」を講説しているのが分かった。この三つの語句のうち「孝養始」「孝養終」は『孝経』の「孝之始」「孝之終」に、また「真実孝養」については、『法苑珠林』がその出典を「清信士度人経」とする「報恩偈」に依っていることは明らかであり、中国における「孝」の思想の反映を読み取る事ができる。では、なぜ法然は逆修法会において「孝」を詳説したかという問題について触れてみたい。この問題については、

而大法主禪門偏為一人孝子大徳被勸深入往生浄土門事
哀被思合候^③

という文に注目する必要がある。この文は『逆修説法』第四七日に説かれる「孝養父母」の最後に出るものである。これは逆修法会の主宰者である中原師秀が、息子である安楽房遵西に勧められて、浄土門に入った事を述べているものである。この文から、四七日に説く「孝養父母」の講説において、法然が中原親子の関係を意識して「孝」を詳説したのではないかと推測できるのである。

さらに清凉寺に三国伝来といわれる釈迦牟尼像を将来した尙然の「尙然上人入唐時爲母修善願文」という逆修法会勤修の発願文を見ていくと、父母健在のうちに「孝」を修する事を明確にして法会を営んだ先例が存在したのである。また尙然の逆修法会は法然の『逆修説法』の「孝養父母」の講説といくつかの共通点を見ることができ、法然の場合のように儒仏両典を用いて母に対する孝の在り方を述べていたのである。

この事から、尙然が母のために逆修法会を営んだ先行事例を法然が

承知していたとすれば、法然が逆修の講説において、奮然と同じ父母健在のうちに「孝」を修するという意趣を含ましながら中原師秀親子を意識する中で孝養父母を詳説していたことが十分に考えられるのである。

〔注〕

- (1) 大谷旭雄氏は、逆修勤修の年時を建久五年頃と推定している。大谷旭雄「逆修法会の成立史的研究―成立年時と成立時の形態考―」(『法然浄土教とその周縁(坤)』、山喜房佛書林、二〇〇七年)
- (2) 安楽房遵西の父親で少外記という役職についていた。この中原氏の家系図等についての考察は、三田全信『増補浄土宗史の諸研究』(山喜房佛書林、一九八〇年)に詳しい。
- (3) 『法然上人行状絵図』第四十八巻(『法然上人伝全集』三一七頁)に、また外記の大夫逆修をいとなみ、上人を請じたてまつりて、唱導とす。
- とある。また、恵空本『漢語灯録』所収の『逆修説法』の末尾の文には、
右六ヶ条ハ是外記ハ禪門ハ西父也ハ修ハ五十日逆修ハ之時ハ以ハ上人ハ為ハ先
六度導師ハ彼説法聞書也結願唱導真觀房也
とあるので、中原師秀が施主となり修された逆修法会の導師は、初七日から六七日が法然であるが、七七日は感西である。
- (4) 中野正明氏は「伝来する諸本のある遺文について対照を行なってみると、最早恵空本の方が良質であつて原型に近く、義山本は明らかに何らかの意図をもつて改変がなされていることは曲げようのない事実である。」と述べている。(『法然遺文の基礎的研究』一七九頁、法蔵館、一九九四年)
- また、林田康順氏は「以上、『古本』の加筆改編作業は、語句の用法などに見られるものの、必要最小限度に留まっているようであり、先に見たような編者の恣意的な改編が散見される『御説法事』や、

- 多くの改編や削除の作業を加えている『無縁集』によるよりも、『古本』そのものによつた方がより正確に法然の説示そのものに近づけると結論づけられる。」と述べている。(『法然上人「逆修説法」諸本の比較研究』、『印度学佛教学研究』第四十五巻第二号、一九九七年)
- (5) 『浄土宗全書』一卷三九頁
 - (6) 『昭和重修法然上人全集』二四〇頁
 - (7) 『昭和重修法然上人全集』二五九頁
ここに挙げた「而大法主禪門偏為一人孝子大徳被レ勸深入ニ往生浄土門事哀被思合候也」の文は他の『逆修説法』の諸本には見ることができない。宇高良哲『逆修説法』諸本の研究三三九頁(文化書院、一九八八年)、岸一英『逆修説法漢語三本対照』六〇頁(私家版、一九九一年)を参照。
 - (8) 禅定の門にはいったものの意で、仏門にはいった男子をいう。在家のままで、髪をそり、僧の姿となつた居士。入道。(石田瑞磨『例文仏教語大辞典』六七九頁)
 - (9) 『昭和重修法然上人全集』一一二頁
 - (10) 『選択本願念佛集』(昭和十五年版、土川勸学宗学興隆会) 九八頁
 - (11) 『昭和重修法然上人全集』二五八頁
 - (12) 『孝経』の引用箇所原文と書き下しは以下の通り。
子曰夫孝徳之本也教之所由生也復坐吾語汝身體髮膚受之父母不敢毀傷孝之始也立身行道揚名於後世以顯父母孝之終也夫孝始於事親中於事君終於立身(『孔子全集(原文)』三三頁)
子曰く、それ孝は徳の本なり、教の由りて生ずる所なり。坐に復れ。吾れ汝に告げん。身體髮膚は、これを父母に受く。敢て毀傷せざるは孝の始なり。身を立て、道を行ひ、名を後世に揚げ、以て父母を顯はすは孝の終なり。それ孝は親に事ふるに始まり、君に事ふるに中し、身を立てるに終る。(『孔子全集(国訳)』四八頁)
 - (13) 『昭和重修法然上人全集』二五八頁
 - (14) 『昭和重修法然上人全集』二五九頁
 - (15) 『大蔵經』五十三巻四四八頁b

- (16) 『昭和新修法然上人全集』二五九頁
(17) 『浄土宗全書』一卷二二〇頁下
(18) 『大蔵経』十六卷
(19) 『浄土宗全書』一卷七〇九頁下
(20) 『浄土宗全書』二卷二九頁下
(21) 『岩波仏教辞典』所収「孝子伝」の項、参照。
(22) 藤原明衡撰。康平三年(一〇六〇年)頃の成立。全十四卷の漢詩文集である。嵯峨天皇から後一条天皇までの詩文四七二編を、「文選」の体裁にならない三九項に分類して収める。詩は少なく、奏状・表・序が豊富で願文・諷誦文なども含む。
(23) 『昭和新修法然上人全集』一三四頁
(24) 『扶桑略記』第二十七卷(『新訂国史大系』第十二卷二五一頁)
(25) 塚本善隆「嵯峨清凉史 平安朝篇 ―棲霞清凉二寺盛衰考―」(『佛教文化研究』第五号、一九五五年)
(26) 『法然上人傳全集』一二頁
(27) 以下、尙然の願文は『本朝文粹』第十三卷(『日本文学大系』第二十三卷五九九〜六〇二頁)による。
(28) 伊藤唯真監修 真柄和人訳注『傍訳逆修説法(下)』三一九頁(四季社、二〇〇七年)
(29) 『昭和新修法然上人全集』二五九頁
(30) 若人欲^ハ報^ル父母恩^ヲ代^リ於^{ケル}父母^ノ發^ス誓願^ヲ入^リ阿蘭若菩提場^ニ昼夜常修^ス於妙道^ニ(『大蔵経』三卷三一七頁b)
(31) 『昭和新修法然上人全集』二五九頁

(よしはら ひろき 文学研究科浄土学専攻修士課程修了)

(指導…藤堂 俊英 教授)

二〇二一年九月二十九日受理

表1 『観無量寿経釈』『逆修説法』『選択本願念仏集』対照表

《凡例》

一、内容は

・上段『観無量寿経釈』、中段『逆修説法』は『昭和新修法然上人全集』を使用した。
下段『選択集』については土川勸学宗字興隆会発行の『選択本願念仏集』を使用した。

・各文献の名称の次に示す数字は、『昭和新修法然上人全集』、土川本『選択本願念仏集』の頁数である。

『観無量寿経釈』

(一一二頁)

『逆修説法』

(二五八〜二五九頁)

『選択集』

(九八頁)

一三福者此是序分中説云云三
福者一者孝養父母奉事師長
慈心不殺修十善業二者受持
三歸具足衆戒不犯威儀三者
發菩提心深信因果讀誦大乘
方等經典勸進行者

一者孝養父母者在家出家人
皆有父母必可致孝養云云

在家孝養父母之旨廣如説云云
論語孝經云云

先三福者經云一者孝養父
母云云二者受持三歸云云三者發
菩提心云云

孝養父母者可レ有世間出
世二孝養

世間孝養者俗家所言孝經
等説是也身軀髮膚受^ハ于父
母不^レ敢毀傷孝始也身体
髮膚受^ハ父母者今以^レ之意
得^ハ有二義一人懷妊後我
妊何物覽有^ハ不^レ人

初三福者經曰一者孝養
父母奉事師長慈心不
殺修十善業二者受持三
歸具足衆戒不犯威儀
三者發菩提心深信因果
讀誦大乘勸進行者經已
文上

孝養父母者付^ハ之有^ハ二一
世間孝養一出世孝養也

世間孝養者如^ハ孝經等説云云

出家孝養廣如說經論釋
尊擔父棺日連贈食於此
等即出家孝養意也聲聞戒

物様々不審可覺事候初
見生者身軀髮膚無違
父母無毀傷事有正子
之時令悅父母心故以之
申孝養始覺候二人身併
父母之身軀也然此身而打
損或與人為口論被切突
或不治振舞付病如此者專
傷父母也然者全此身我
身父母身分者思構不毀
傷申孝養始歟覺候立身
行道隨已家各學行可
學習之道揚名開德仕身
朝廷施譽四海被云是
其人之子顯父母名申
孝養終也孝經舉五等孝
養則天子諸侯卿大夫士庶
人也有水瓶孝養是採新
結水捻菜拾菓朝暮養父
母孝養也又有顏色孝養
是守父母顏隨其趣何事
不違心也孔子曰色難是
皆世間孝養也

次出世孝養者流轉三界中
恩愛不能斷棄恩入無為真
實報恩者申不繼父道不
事法

者有生緣奉事法菩薩戒者
孝順父母云孝養法有內
外共是不聊爾威以是為
往生業云

隨母心不運水瓶之志
不守顏色之趣而或交山
林或住蘭若修行佛道
者當時思者似不知感恩
忘德暫棄有漏恩德終求
無為報謝也是申真實孝養
也故心地觀經云若人欲報
父母恩代於父母發誓願
入阿蘭若菩提場晝夜常修
於妙道云又出世可有立
身行道義智行內積名德外
顯被云三藏法師禪師律
師即其意也或被云羅什
三藏玄奘三藏被云南岳大
師天台大師即是也又出世
孝養必可棄父母云事不
候也即律中有生緣奉事法
謂父貧者置寺內養之
母貧者置寺外養之云云
彼此隨人意樂可依時宜
也梵網經說孝順父母
師僧名戒矣如來在世時有
外道名曰須昨陀永不歸
佛法然佛遣阿難尊者遣
召須昨陀其故阿難過去五
百生間有生須昨陀子依
其因緣可隨阿難教化故

也阿難承_ニ仏勅_ヲ誘_ニ須跋陀_ニ
具_レ詣_ニ仏所_ニ令_レ聞_ニ仏所説_ヲ
即開_レ解云因縁_ノ候也_ヲ以_レ之_ハ
思_ニ同善知識申_ト父母之間_ニ
藉_テ宿縁深_ニ可_レ易_カ隨_ニ教化_ニ
候而大法主禪門偏_ニ為_ニ一人_ニ
孝子大徳_ノ被_レ勸深入_ニ往_ニ
生浄土門_ニ事哀_ニ被_レ思合_ニ候_ニ
也